

読者に「この本を読みたい」と思ってもらう

Kindle本の「はじめに」を完成させる書き方

本のテーマが決まった。

読者も決まった。

タイトルと構成も作れた。

いよいよ原稿を書こうとして、

最初に「はじめに」を書き始めたものの、

「何から書けばいいのかわからない」

「自己紹介が長くなってしまう」

「本の内容を説明しているだけで、つまらない気がする」

「読者に伝えたいことが多すぎて、まとまらない」

と、手が止まっていますか？

本の最初にある「はじめに」は、短い文章です。

しかし、いざ書こうとすると、とても難しく感じます。

なぜなら、「はじめに」には複数の役割があるからです。

- ・読者の悩みに共感する
- ・この本が自分向けだと感じてもらう
- ・読むことで何が得られるか伝える
- ・著者を信頼してもらう
- ・続きが気になる状態を作る

これらを短い文章の中で伝える必要があります。

最初からすべてをうまく書こうとすると、なかなか言葉が出てきません。

そこで多くの方が、

「こんにちは。著者の〇〇です」

「私はこれまで〇年間、〇〇をしてきました」

と、自己紹介から書き始めます。

もちろん、著者について伝えることも必要です。

しかし、読者が最初に知りたいのは、著者の詳しい経歴ではありません。

読者が最初に考えているのは、

この本は、自分の悩みに役立つのか

ということです。

「はじめに」で読者の関心をつかめなければ、せっかく良い内容を書いていても、本文へ進んでもらえない可能性があります。

今回は、初心者でも読者の心をつかめる「はじめに」の基本を紹介します。

「はじめに」は、著者の挨拶ではない

「はじめに」と聞くと、

著者が読者へ挨拶する場所だと思うかもしれません。

たしかに、挨拶の役割もあります。

しかし、最も大きな役割は、

読者に、この本を読み続ける理由を渡すこと

です。

読者は、タイトルや表紙に興味を持って本を開きます。

ですが、まだ最後まで読むと決めたわけではありません。

最初の数ページを読みながら、

- ・自分が知りたい内容なのか
- ・自分にも理解できそうか
- ・読む時間を使う価値があるか
- ・著者の話を信じられそうか

を判断しています。

だからこそ、「はじめに」では、

「この本には、こんなことが書いてあります」

と説明するだけでは足りません。

読者に、

「自分の悩みをわかっている」

「この本なら、今の状況から進めるかもしれない」

と感じてもらう必要があります。

読者は、著者よりも自分のことに興味がある

本を書く側は、

「自分がなぜこの本を書いたのか」

を伝えたいです。

どれだけ努力したのか。

どんな経験をしてきたのか。

どんな実績があるのか。

これらは著者にとって大切なことです。

しかし、読者は最初から著者に強い興味を持っているとは限りません。

読者が知りたいのは、

「自分の悩みを、この本がどう解決してくれるのか」

です。

たとえば、「はじめに」が次の文章から始まっていたとします。

「私は20年間、会社員として働いてきました。その後、副業を始め、さまざまな経験をしてきました」

著者の経歴は伝わります。

しかし、読者は、

「それが自分にどう関係するのだろう」

と感じるかもしれません。

一方で、

「副業に興味はあるものの、仕事や家事で時間がなく、何から始めればいいのかわからず止まっていますか？」

と始めれば、同じ悩みを持つ読者は自分のこととして読み始められます。

読者の関心を引いてから、

「私自身も同じことで悩みました」

と著者の経験を伝える方が、自然に読んでもらえます。

最初に必要なのは、正しい説明より共感

「はじめに」で、すぐにノウハウを説明し始める方もいます。

たとえば、

「Kindle出版には、テーマ設定、読者設定、構成、原稿作成、表紙作成、KDP登録が必要です」

これは正しい説明です。

しかし、読者はまだ、

「自分にもできるのか」

「途中で挫折しないか」

と不安を感じています。

正しい情報だけを渡しても、気持ちが置き去りになれば、読み進める意欲は高まりません。

最初に必要なのは、

「あなたが今、ここで悩んでいることは自然です」

「同じ場所で止まる人はたくさんいます」

「一つずつ進めれば大丈夫です」

という共感と安心です。

人は、自分の悩みを理解してくれる相手の話を聞きたくなります。

「はじめに」は、著者の知識を見せる場所ではありません。

読者との距離を縮める場所です。

「この本を読むとどうなれるか」を曖昧にしない

読者は、ただ情報を増やすためだけに本を読むとは限りません。

今の悩みを解決したい。

何かをできるようになりたい。

不安を小さくしたい。

行動するきっかけがほしい。

そのような変化を求めています。

そのため、「はじめに」では、

本を読んだあとに、読者がどうなれるのかを伝えます。

たとえば、

「Kindle出版について詳しく説明します」

だけでは、変化が見えません。

一方で、

「この本を読み終える頃には、自分の出版テーマと読者を決め、最初の目次を作れるようになります」

と書けば、ゴールが見えます。

読者は、

「自分に必要な本か」

を判断しやすくなります。

ただし、約束を大きくしすぎてはいけません。

「この本を読めば必ずベストセラーになります」

「人生が完全に変わります」

のような約束は、内容と一致しない可能性があります。

この本で、本当に読者をどこまで連れていけるのか。

現実的で具体的な変化を伝えることが大切です。

「全部読んでください」と言わなくてもいい

本を書くと、

「最初から最後まで順番に読んでほしい」

と思うかもしれません。

しかし、読者によって現在地は違います。

最初から順番に読む人もいれば、必要な章から読みたい人もいます。

実用書やノウハウ本の場合は、

「すでにテーマが決まっている方は、第3章から読んでも構いません」

「まず全体像を知りたい方は、順番に進めてください」

のように、読み方を案内すると親切です。

読者に選択肢を渡すことで、

「自分のペースで読める本だ」

と感じてもらえます。

すべてを読ませることより、

読者が必要な内容へたどり着けることの方が大切です。

「はじめに」でよくある5つの失敗

初心者が「はじめに」を書くとき、よく起こる失敗があります。

1. 自己紹介が長すぎる

経歴、実績、資格、過去の活動を詳しく書きすぎると、読者の悩みが後回しになります。

自己紹介は、

「なぜ自分がこのテーマを語れるのか」

が伝わる範囲で十分です。

2. 本の内容を目次のように並べるだけ

「第1章では〇〇、第2章では〇〇」

と説明するだけでは、読む価値が伝わりにくくなります。

内容だけでなく、

「読むことで何ができるのか」

を伝えます。

3. 読者の不安をあおりすぎる

「このままでは大変なことになります」

「知らないと必ず失敗します」

と強くあおると、不信感を持たれることがあります。

不安に共感しながらも、安心して進める文章を目指します。

4. 話が長く、本文が始まらない

「はじめに」の中で、すべてを説明しようとするとう長くなります。

詳しい説明は本文へ残し、読者が続きを読みたくなる余白を作ります。

5. 誰に向けた本なのかわからない

「多くの方に役立つ内容です」

だけでは、読者は自分向けか判断できません。

どのような悩みを持つ人に読んでほしいのかを明確にします。

最初の一文で、完璧に心をつかまなくてもいい

「最初の一文が大切」

と聞くと、

誰も思いつかないような名文を書かなければいけないとを感じるかもしれません。

ですが、初心者向けの実用書では、奇抜な言葉は必要ありません。

読者が実際に感じている悩みを、そのまま言葉にするだけでも十分です。

たとえば、

「本を出してみたいと思いながら、何を書けばいいかわからず止まっていますか？」

「毎月節約しているのに、なぜかお金が残らないと感じていませんか？」

「仕事と家事で一日が終わり、自分のための時間を諦めていませんか？」

こうした一文は、派手ではありません。

しかし、同じ悩みを持つ読者には伝わります。

最初の一文で大切なのは、著者のセンスを見せることではなく、

読者に、

「これは自分の話だ」

と思ってもらうことです。

「はじめに」は、最後に書いてもいい

原稿は「はじめに」から書くものだと思われがちです。

しかし、実際には本文を書き終えてから「はじめに」を作る方法もあります。

本文を書き終わると、

- ・この本で一番伝えたいこと
- ・読者がつまずきやすい場所
- ・読後にできるようになること
- ・自分がこの本を書いた理由

が、より明確になります。

そのため、最初は仮の「はじめに」を作り、本文完成後に書き直しても構いません。

最初の文章が決まらないために、原稿全体を止める必要はありません。

ここまで読んで、「はじめに」を書けそうですか？

ここまで、

- ・「はじめに」は読者が読み続ける理由を作る場所
- ・著者の話より先に、読者の悩みを書く
- ・正しい説明だけでなく、共感と安心を届ける
- ・読後の変化を具体的に伝える
- ・最初は仮の文章でも構わない

ということをお伝えしました。

ここまで読むと、

「読者の悩みから始めればいいのか」

と感じるかもしれません。

しかし、実際に書こうとすると、次のような疑問が出てきます。

- ・悩みをどこまで具体的に書けばいいのか
- ・共感とあおりの違いがわからない
- ・自己紹介をどこに入れるのか
- ・著者の実績が少ない場合は何を書けばいいのか
- ・本の内容をどのくらい説明するのか
- ・読後の変化を大げさにせず魅力的に伝えたい
- ・文章が長くなり、まとめられない
- ・AIに書かせると、ありきたりな文章になる

「はじめに」が難しいのは、文章力がないからではありません。

複数の役割を、正しい順番に並べる必要があるからです。

ここから先では、読者の気持ち自然に動く順番に沿って、実際に「はじめに」を完成させます。

ここから先で得られること

有料部分では、「はじめに」の考え方を学ぶだけではありません。

7つの要素を順番に埋めることで、初心者でも一つの文章として完成できる形にしています。

1. 読者の心が動く7つの流れがわかる

「はじめに」を、次の7つの順番で作ります。

1. 読者の悩みを言葉にする
2. 悩みへの共感を示す
3. 悩みが解決しない理由を伝える

4. この本で伝える考え方を見せる
5. 読後の変化を約束する
6. 著者が書く理由を伝える
7. 読み方と最初の一步を案内する

何から書けばいいか迷わなくなります。

2. 最初の一文を作る5つの型が手に入る

- ・悩みへの問いかけ
- ・読者の心の声
- ・よくある行動
- ・思い込みの否定
- ・理想と現実の差

の5つから、自分の本に合う始め方を選べます。

3. 自己紹介を長くせず、信頼につなげられる

経歴をすべて書くのではなく、

「なぜ、この読者の悩みを理解できるのか」

に必要な経験だけを選ぶ方法を紹介します。

4. 読者をあおらず、悩みを深く表現できる

不安を強くするのではなく、

「今まで進めなかったのは、あなたの能力不足ではない」

と安心を渡しながら、続きを読みたくなる文章を作ります。

5. 自分の本に合った読後の変化を言葉にできる

「役立つ本です」

「詳しく解説します」

で終わらず、

「読み終えたあと、何ができるのか」

を具体的に伝えます。

6. AIを使って、自分らしい「はじめに」に整えられる

AIに全文を丸投げするのではなく、一問ずつ質問してもらい、自分の経験や言葉を引き出すプロンプトを用意しています。

7. 穴埋めテンプレートで「はじめに」を完成できる

最後に、7つの要素を一つの文章へまとめるテンプレートを紹介します。

記事を読み終える頃には、仮の「はじめに」が完成します。

この先は、こんな方におすすめです

- ・最初の一文が書けず、原稿が止まっている
- ・「はじめに」が自己紹介ばかりになっている
- ・読者の悩みに共感する文章を作りたい
- ・本を読むメリットをうまく説明できない
- ・自分の実績に自信がない
- ・押し売りのように見えない文章にしたい
- ・AIを使いながら、自分の言葉で仕上げたい
- ・本文へ自然につながる導入を作りたい

価格は500円です。

読者は、あなたが原稿へかけた時間をまだ知りません。

最初の数ページを読みながら、

「この先も読んでみよう」

と判断します。

ここから先では、立派な文章を書くのではなく、

読者が安心して次のページへ進める文章

を作ります。

本の最初で読者との距離を縮め、最後まで読み進めてもらいたい方は、このまま続きをご覧ください。

ここから有料部分です

「はじめに」で手が止まっても大丈夫です

ここからは、実際に「はじめに」を作っていきます。

質問に答えている途中で、

「うまい言葉が出てこない」

「こんな普通の文章でいいのだろうか」

「読者の気持ちを勝手に決めていないか不安」

と感じるかもしれません。

最初から完成した文章を書く必要はありません。

まずは、きれいな文章ではなく、材料を集めます。

次の3つを意識してください。

1. 読者の言葉を使う

著者が考えた専門的な表現よりも、読者が実際に使う言葉を優先します。

2. 一文ずつ作る

最初から長い「はじめに」を完成させようとしません。

7つの要素を別々に作り、最後に並べます。

3. わからない部分は、AIに質問してもらう

一人で悩み続けず、AIを壁打ち相手として使って構いません。

後半に、質問形式で材料を引き出すプロンプトを用意しています。

「はじめに」を作る前に用意する4つの情報

まず、これまでのワークで作った内容を用意します。

1. 想定読者

どのような人に向けた本ですか？

2. 読者の悩み

今、何に困っていますか？

3. 読後の変化

読み終えたあと、何ができるようになりますか？

4. 自分が書く理由

なぜ、自分がこのテーマを伝えるのでしょうか？

この4つが、「はじめに」の土台になります。

読者の心が動く7つの流れ

「はじめに」は、次の7つの要素から作ります。

1. 読者の悩みを言葉にする
2. 悩みへの共感を示す
3. 悩みが解決しない理由を伝える
4. この本で伝える考え方を見せる
5. 読後の変化を約束する
6. 著者が書く理由を伝える
7. 読み方と最初の一步を案内する

一つずつ作っていきましょう。

1. 読者の悩みを言葉にする

最初に、読者が今感じている悩みを書きます。

ここで大切なのは、著者の説明ではなく、読者の心の中にある言葉を使うことです。

たとえば、Kindle出版初心者なら、

- ・自分には書けることがない
- ・文章に自信がない
- ・何から始めればいいのかわからない

- ・途中で挫折しそう
- ・本当に自分が出版していいのか不安

と感じているかもしれません。

ワーク

読者は、今どんなことで悩んでいますか？

- ・
- ・
- ・

その悩みを、本人が話しそうな言葉にしてください。

著者の言葉

出版テーマの設計ができていない。

読者の言葉

何について書けばいいのかわからない。

読者の言葉を使うことで、距離が縮まります。

最初の一文を作る5つの型

最初の一文が出ない場合は、次の型を使ってください。

型1 悩みへの問いかけ

読者の悩みを質問にします。

テンプレート

〇〇したいと思いながら、△△で止まっていますか？

例

本を出してみたいと思いながら、何を書けばいいかわからず止まっていますか？

副業を始めたいと思いながら、仕事や家事の忙しさを理由に先延ばしにしていますか？

型2 読者の心の声

読者が心の中で考えていることを、そのまま並べます。

例

「自分には、本にできるほどの経験がない」

「文章を書くことも得意ではない」

「本を出せるのは、特別な人だけではないか」

そう思っていますか？

型3 よくある行動

読者が何度も行っていることを描きます。

例

Kindle出版について検索し、動画やブログを見ている。

それでも情報が多すぎて、結局何から始めればいいのかわからない。

そんな状態になっていませんか？

型4 思い込みの否定

読者が持っている思い込みを、やわらかく否定します。

例

本を書くために、特別な実績や文章の才能が必ず必要なわけではありません。

注意

いきなり強く否定するのではなく、読者の気持ちを受け止めたうえで使います。

型5 理想と現実の差

読者が望んでいることと、現在の状態を並べます。

例

いつか自分の経験を一冊の本にしたい。

そう思っているのに、毎日の仕事や家事に追われ、何か月も最初の一行を書けずにいる。

この型は、感情を具体的に伝えやすくなります。

2. 悩みへの共感を示す

悩みを書いたあとに、

「その気持ちは自然なものです」

と伝えます。

ただし、

「わかります」

だけでは、共感が浅く見えることがあります。

なぜ、その悩みを理解できるのかを短く加えます。

共感の作り方

- ・自分も同じことで悩んだ
- ・多くの相談者が同じ場所で止まっている
- ・初めてなら迷って当然である
- ・情報が多いため、混乱しやすい
- ・真剣に考えているからこそ、決められない

例

初めて本を書こうとすれば、何から始めればいいかわからないのは当然です。

テーマ、タイトル、原稿、表紙、Amazonへの登録。

一度にすべてを考えようとすれば、誰でも難しく感じます。

共感で避けたいこと

- ・読者の気持ちを決めつける
- ・必要以上に深刻にする
- ・長い自分語りへ移る
- ・すぐに説教や解決策を始める

共感の目的は、読者に、

「この著者は、自分の状況を理解してくれている」

と感じてもらうことです。

3. 悩みが解決しない理由を伝える

次に、読者が今まで進めなかった理由を伝えます。

ここで大切なのは、読者を責めないことです。

たとえば、

「行動力がないから進めない」

「努力が足りない」

と書くと、読者は責められたように感じます。

代わりに、

- ・全体の順番を知らなかった
- ・一度に全部考えていた
- ・自分に合わない方法を試していた
- ・完璧な答えを出そうとしていた
- ・必要な作業が大きすぎた

と、改善できる原因を示します。

テンプレート

進めなかったのは、〇〇が足りないからではありません。

〇〇の方法を知らなかったことが原因です。

例

原稿を書けなかったのは、文章力がないからではありません。

誰に、何を、どの順番で伝えるかが決まっていなかったため、最初の一文を選べなかったのです。

この文章により、読者は、

「自分にも改善できるかもしれない」

と感じやすくなります。

4. この本で伝える考え方を見せる

読者の悩みと原因を示したあとに、

この本ではどのように解決するのかを伝えます。

すべての方法を詳しく説明する必要はありません。

本の中心となる考え方や道筋を示します。

例

この本では、Kindle出版を一つの大きな作業として考えません。

テーマ、読者、タイトル、構成、原稿、表紙、登録という小さな工程に分け、一つずつ進めます。

テンプレート

この本では、〇〇という考え方をもとに、△△を進めます。

確認するポイント

- ・他の本と違う方法があるか
- ・初心者にも理解できるか

- ・読者が安心できる内容か
- ・本文の内容と一致しているか

ここでは、詳しいノウハウよりも、

「この本なら、自分にも進められそう」

と思ってもらうことが大切です。

5. 読後の変化を約束する

次に、本を読み終えたあと、読者がどうなれるのかを伝えます。

悪い例

この本には、Kindle出版に役立つ情報がたくさん入っています。

情報があることは伝わりますが、読者の変化が見えません。

改善例

この本を順番に進めることで、自分の出版テーマと読者を決め、最初の目次を作れるようになります。

テンプレート

この本を読み終える頃には、〇〇できる状態を目指します。

「必ずできます」と断言する必要はありません。

読者が行動した場合に目指せる、現実的な変化を伝えます。

読後の変化が思いつかない場合

次の質問に教えてください。

- ・読者は、今何が決まっていないか
- ・本を読み終えた直後、何を始められるか
- ・自分で判断できるようになることは何か

- ・どんな不安が小さくなるか
- ・次の段階は何か

例

読む前

何を書けばいいかわからない。

読むあと

自分の経験を棚卸しし、テーマ候補を3つ作れる。

読む前

タイトル候補が一つしかない。

読むあと

複数の型を使い、30案から3案まで絞れる。

読後の変化は、読者が実際にできる行動で表します。

6. 著者が書く理由を伝える

ここで、著者自身の経験を伝えます。

自己紹介をすべて書く必要はありません。

この本のテーマに関係する経験だけを選びます。

著者が書く理由として使えるもの

- ・自分も同じ悩みを経験した
- ・失敗しながら解決方法を見つけた
- ・仕事として多くの人を支援した
- ・長年、その分野を続けてきた
- ・何度も相談を受けてきた
- ・複数の方法を試してきた

テンプレート

私自身も、〇〇で悩んだ経験があります。

その後、〇〇を試し、△△できるようになりました。

また、〇〇をサポートする中で、同じ場所で止まる方を多く見てきました。

その経験をもとに、この本を書いています。

実績が少ないと感じる場合

立派な数字を無理に作る必要はありません。

次のような経験も、書く理由になります。

- ・以前の自分より少し先へ進んだ
- ・初心者が迷う場所を理解している
- ・自分なりに試行錯誤した
- ・家族や友人に説明した経験がある
- ・失敗した理由を具体的に話せる

読者が知りたいのは、著者が世界一かどうかではありません。

自分の悩みを理解し、現実的な方法を伝えられる人かどうかです。

7. 読み方と最初の一步を案内する

最後に、この本の読み方を伝えます。

案内できる内容

- ・最初から順番に読む
- ・必要な章から読む
- ・ワークでは紙やメモを用意する
- ・すべてを一日で終えなくてよい
- ・AIを補助として使う
- ・完璧な答えを出さなくてよい

例

この本は、テーマ決めから出版準備まで順番に進められる構成になっています。

初めて出版する方は、第1章から読み進めてください。

すでにテーマが決まっている方は、必要な章から始めても構いません。

ワークで手が止まったときは、各章に掲載しているAIへの質問例も活用してください。

最初から完璧な答えを出す必要はありません。

一つずつ仮の答えを書きながら進めていきましょう。

最後に、

「それでは始めましょう」

と本文へつなげます。

7つの要素を並べる

ここまで作った文章を、次の順番に並べます。

1. 読者の悩み
2. 悩みへの共感
3. 解決できなかった理由
4. この本で伝える方法
5. 読後の変化
6. 著者が書く理由
7. 読み方と最初の一步

いきなり一つの文章にしようとせず、まず別々に書いてください。

そのあと、重複を削り、接続する言葉を加えます。

穴埋め式「はじめに」テンプレート

次の文章へ、自分の内容を入れてください。

「〇〇したい」

そう思いながら、

「〇〇できない」

「〇〇がわからない」

「〇〇ではないかと不安」

と感じ、止まっていますか？

初めて〇〇に取り組むとき、迷うのは自然なことです。

〇〇、〇〇、〇〇と、考えることが多いため、一度にすべてを進めようとするとうまく感じません。

進められなかったのは、あなたに〇〇がないからではありません。

〇〇の順番や方法を知らなかったことが、大きな原因です。

この本では、〇〇という考え方をもとに、〇〇を一つずつ進めます。

具体的には、

- ・〇〇
- ・〇〇
- ・〇〇
- ・〇〇

について解説します。

本を読み終える頃には、

〇〇できる状態を目指します。

私自身も、以前は〇〇に悩んでいました。

その後、〇〇を試し、〇〇できるようになりました。

また、〇〇を通じて、同じ悩みを持つ方と関わってきました。

その経験をもとに、初心者の方が〇〇できるよう、この本を書いています。

この本は、〇〇という順番で進みます。

初めて取り組む方は、第1章から順番に読み進めてください。

すでに〇〇ができている方は、必要な章から読んでも構いません。

ワークで手が止まった場合は、〇〇も活用してください。

最初から完璧に進める必要はありません。

まずは、〇〇から始めてみましょう。

「はじめに」の記入例

ここでは、

「Kindle出版を始めたい初心者向けの本」

を例にします。

「いつか、自分の本を出してみたい」

そう思いながら、

「自分には書けるほどの経験がない」

「文章を書くことに自信がない」

「何から始めればいいのかわからない」

と感じ、止まっていますか？

初めてKindle出版に挑戦するとき、迷うのは自然なことです。

テーマ、読者、タイトル、構成、原稿、表紙、Amazonへの登録。

考えることが多いため、一度にすべてを進めようすると、難しく感じます。

出版へ進めなかったのは、文章の才能や特別な実績がないからではありません。

出版までに何を、どの順番で決めればいいのかを知らなかったことが、大きな原因です。

この本では、Kindle出版を一つの大きな作業として考えません。

テーマ決め、読者設定、タイトル、構成、原稿作成という小さな工程に分け、一つずつ進めます。

具体的には、

- ・自分の経験からテーマを見つける方法
- ・読者を一人に絞る方法
- ・本の企画とタイトルを作る方法
- ・原稿を書きやすい目次の作り方
- ・AIを使いながら自分の言葉を整える方法

について解説します。

本を読み終える頃には、自分の本のテーマと読者を決め、仮のタイトルと目次を作り、最初の原稿を書き始められる状態を目指します。

私自身も、初めから迷わず出版できたわけではありません。

何を書けばいいのか。

どこまで書けばいいのか。

表紙やタイトルはどうすればいいのか。

一つずつ迷いながら出版を進めてきました。

その後、自分の本を出版するだけでなく、Kindle出版を始めたい方の企画、原稿、表紙作りにも関わってきました。

その中で、多くの初心者が、文章を書く前の段階で止まっていることに気づきました。

そこで、この本では、出版の知識を並べるだけではなく、読みながら実際に自分の本を作る形を目指しています。

初めて出版する方は、第1章から順番に読み進めてください。

すでにテーマや読者が決まっている方は、必要な章から始めても構いません。

各章には、実際に手を動かすワークを用意しています。

一人で答えが出ない場合は、AIへ一問ずつ質問してもらう方法も紹介します。

最初から完璧な答えを作る必要はありません。

仮のテーマでも、仮のタイトルでも構いません。

まずは、自分の中にある経験を一つ書き出すところから始めてみましょう。

自己紹介が長くなったときの削り方

自己紹介を書き始めると、経歴をすべて入れたいことがあります。

次の質問を使って、必要な内容だけを残してください。

- ・この経験は、本のテーマと関係があるか
- ・読者の悩みを理解できる理由になるか
- ・本の方法を信頼する材料になるか
- ・本文で詳しく説明できるか
- ・なくても読者は困らないか

テーマと関係のない実績は、著者紹介へ回せます。

削る前の例

私は大阪で生まれ、学生時代は〇〇部に入り、卒業後は〇〇会社へ入社しました。その後、転職を経験し、結婚して子どもが生まれました。現在は複数の仕事をしています。

整えた例

私は会社員として働きながら副業を始め、限られた時間の中でKindle出版に取り組んできました。

その後、出版を始めたい方の企画や原稿作りをサポートする中で、多くの初心者が同じ場所で止まることに気づきました。

本のテーマに必要な部分だけを残すと、信頼が伝わりやすくなります。

共感があおりになっていないか確認する

読者の悩みを深く書こうとすると、不安を強調しすぎることがあります。

あおりが強い例

今すぐ出版しなければ、あなたの経験は誰にも知られないまま消えてしまいます。

このまま行動しなければ、一生後悔するでしょう。

共感を中心にした例

本を出してみたいと思いながら、仕事や家庭の忙しさで後回しになることは珍しくありません。

まずは、一冊を完成させることなく、書きたい経験を一つ見つけるところから始めてみましょう。

確認する質問

- ・読者を必要以上に怖がらせていないか
- ・著者のサービスへ誘導するためだけの不安になっていないか
- ・不安を示したあと、安心や解決への道を伝えているか
- ・読者の責任だけにしていないか

「はじめに」では、不安を強くするより、

「自分にも進めそう」

と思ってもらうことを優先します。

「はじめに」が長くなりすぎた場合

書きたいことをすべて入れると、「はじめに」が長くなることがあります。

その場合は、次の部分を削ります。

1. 詳しすぎる自己紹介

テーマに関係する経験だけを残します。

2. 本文で説明するノウハウ

詳しい手順は本文へ移します。

3. 同じ悩みの繰り返し

似た悩みは、代表的な3つ程度に絞ります。

4. 章ごとの詳しい説明

各章を一つずつ説明せず、本全体の流れを短く伝えます。

5. 強調の繰り返し

「大切です」「重要です」が何度も続いていないか確認します。

最初の下書きでは長くても構いません。

あとから、同じ役割の文章を一つにまとめます。

短すぎる「はじめに」へ追加したい内容

反対に、

「この本では〇〇について説明します。ぜひ読んでください」

だけで終わっている場合は、次の内容が不足していないか確認してください。

- ・読者の悩み
- ・悩みへの共感
- ・なぜ解決できなかったか
- ・この本で使う方法
- ・読後の変化
- ・著者が書く理由
- ・読み方

すべてを長く書く必要はありません。

それぞれ1文から3文でも、役割を入れることで伝わりやすくなります。

「はじめに」をAIと一緒に作る方法

一人で文章にできない場合は、AIに質問してもらいながら材料を集めます。

全文をいきなり書かせるのではなく、自分の経験や考えを先に伝えることが大切です。

AIへのプロンプト

私は、初心者向けKindle本の「はじめに」を作っています。

あなたはKindle出版の編集者として、読者が続きを読みたくなる「はじめに」を作るために、私へ一度に一つずつ質問してください。

現在わかっている内容は次の通りです。

本の仮タイトル：

本のテーマ：

想定読者：

読者の悩み：

読後にできるようになること：

私がこの本を書く理由や経験：

本の中で紹介する方法：

次の7つの要素が明確になるまで質問を続けてください。

1. 読者が今感じている悩み
2. その悩みへの共感
3. 今まで解決できなかった理由
4. この本で伝える考え方や方法
5. 本を読んだあとの変化
6. 私がこの本を書く理由
7. 本の読み方と最初の一步

質問には、答え方の短い例を一つ添えてください。

私の回答が曖昧な場合は、勝手に内容を作らず、さらに具体化する質問をしてください。

すべての質問が終わったら、私の回答を使い、次の条件で「はじめに」の下書きを作ってください。

- ・最初は読者の悩みから始める
- ・著者の自己紹介を長くしすぎない
- ・過度に不安をあおらない
- ・初心者が安心できる言葉を使う
- ・読後の変化を具体的に伝える
- ・難しい専門用語を避ける
- ・本文へ自然につなげる
- ・私が使っていない実績や経験を勝手に追加しない

作成後、文章の役割がわかるように、7つの要素がどこに入っているかも説明してください。

AIが書いた文章を自分の言葉へ戻す

AIが作った文章は、読みやすくても、自分らしさが薄いことがあります。

次の点を修正してください。

1. 自分が普段使わない言葉を変える

「新たな一歩を踏み出しましょう」

という言葉は普段使わないなら、

「まず一つ書き出してみましょう」

のように変えます。

2. 自分の具体的な経験を一つ入れる

一般的な文章だけでなく、

「私も最初の一冊では、テーマを決めるだけで何週間も迷いました」

のような実体験を加えます。

3. 大げさな表現を小さくする

「人生を変える一冊」

ではなく、

「次の一歩を決められる一冊」

のように、本文に合う表現へ変えます。

4. 同じ言葉の繰り返しを削る

「初心者」「一歩」「安心」などが何度も続いていないか確認します。

5. 声に出して読む

自分が人に話すときの言葉として自然か確認してください。

AIへの修正指示例

自己紹介が長い場合

「著者の経歴を半分にし、読者の悩みを中心にしてください」

文章が一般的すぎる場合

「私が〇〇で失敗した具体的な経験を一つ入れてください」

あおりが強い場合

「不安を強調せず、初心者が安心できる文章へ変更してください」

読後の変化が曖昧な場合

「本を読み終えた直後に、読者ができる行動を具体的にしてください」

文章がかたい場合

「難しい言葉を避け、会話するような自然な文章にしてください」

長すぎる場合

「7つの役割を残したまま、全体を3割程度短くしてください」

自分の言葉ではない場合

「私の原文にある表現を優先し、新しいキャッチコピーを増やさないでください」

「はじめに」の長さはどのくらいがいいのか

絶対的な文字数の決まりはありません。

本の内容や読者によって変わります。

初心者向けのノウハウ本では、読者の悩み、読後の変化、著者が書く理由、読み方が伝わる長さにします。

大切なのは文字数ではなく、

- ・本文が始まる前に読者が疲れない
- ・本を読む理由がわかる
- ・必要な信頼が伝わる
- ・続きが気になる

という状態になっていることです。

長くなった場合は、各段落の役割を確認してください。

同じ役割の段落が複数あるなら、まとめられます。

完成後に確認する10のチェックリスト

- 最初に読者の悩みが書かれている
- 読者が使いそうな言葉で共感が伝わっている
- 読者を責めず、解決できなかった理由が説明されている
- この本の方法や考え方がわかる
- 読後にできることが具体的に示されている
- 著者の経験や自己紹介がテーマとつながり、長すぎない
- 本の読み方がわかり、本文へ自然につながっている
- 過度な約束や不安をあおる表現がない
- 同じ内容の繰り返しがなく、声に出して読んでも自然である
- 読者が「これは自分向けの本だ」と感じられる

すべてにチェックが入らなくても構いません。

ただし、

- ・読者の悩み
- ・読後の変化
- ・著者が書く理由

の3つは必ず確認してください。

最終ワーク 自分の「はじめに」を完成させる

次の項目を一文ずつ書いてください。

1. 読者の悩み

読者は、何に悩んでいますか？

2. 最初の一文

5つの型から、一つ選んで作ってください。

3. 共感

なぜ、その悩みを理解できますか？

4. 解決できなかった理由

読者が進めなかった本当の理由は何ですか？

5. この本で伝える方法

どのような考え方や手順を紹介しますか？

6. 読後の変化

読み終えたあと、何ができるようになりますか？

7. 著者が書く理由

どのような経験をもとに書きますか？

8. 本の読み方

どのように読み進めればよいですか？

9. 最初の一步

読者に、まず何をしてほしいですか？

すべてを書き終えたら、穴埋めテンプレートへ入れ、一つの文章としてつなげます。

書き終えたあと、一晩置いて読み直す

「はじめに」を書いた直後は、自分の文章を客観的に見にくいものです。

可能であれば、一晩置いてから読み直してください。

次の日に読むと、

- ・自己紹介が長い
- ・同じ説明が続いている
- ・読者の悩みが見えない
- ・言葉がかたすぎる
- ・読後の変化が曖昧

といった点に気づきやすくなります。

すぐに公開や出版をする場合でも、声に出して読むだけで違和感を見つけられます。

「はじめに」を書いたあと、本文との一致を確認する

「はじめに」で約束した内容が、本文に入っているかを確認します。

たとえば、

「この本を読めば、30日で出版準備が整います」

と書いたなら、本文に30日間の具体的な手順が必要です。

「AIを使いながら進められます」

と書いたなら、AIの使い方や質問例が必要です。

「初心者でもわかります」

と書いたなら、専門用語の説明や簡単な手順が必要です。

「はじめに」は宣伝文ではありません。

本文で果たす約束を伝える場所です。

今日やること

この記事を読み終えたら、次の3つを行ってください。

1. 読者の悩みを3つ書き出す

著者の言葉ではなく、読者本人が使いそうな言葉で書いてください。

2. 7つの要素を一文ずつ作る

最初から長い文章にせず、材料を別々に作ります。

3. 穴埋めテンプレートで仮の「はじめに」を完成させる

完成度は60%で構いません。

本文を書いたあとに、もう一度整えます。

一人で言葉にできない部分は、この記事内のAIプロンプトを使い、一問ずつ質問してもらってください。

最後に

「はじめに」は、著者が自分のことを知ってもらうための文章ではありません。

読者に、

「この本は、自分の悩みをわかっている」

「ここなら、自分も進めるかもしれない」

と感じてもらうための文章です。

立派な文章を書く必要はありません。

印象的な名言を作る必要もありません。

読者が今感じていることを、本人が使う言葉で表す。

進めなかった理由を責めずに説明する。

この本で、どこまで進めるのかを伝える。

なぜ自分がこの本を書いたのかを、必要な範囲で話す。

そして、

「まずは、ここから始めてみましょう」

と次のページへ案内する。

この流れがあれば、「はじめに」の土台は完成します。

読者は、最初からあなたを信頼しているわけではありません。

だからこそ、強い言葉で説得するのではなく、

「この人は、自分のことをわかってくれている」

という小さな信頼を積み重ねてください。

その信頼が、次のページを開く理由になります。

次回は、

「文章が苦手でも大丈夫。Kindle原稿を最後まで書き切る方法」

をテーマに、原稿を途中で止めず、完成まで進めるための書き方とスケジュールを解説します。